

K A J I Y A
加治屋遺跡2

1996年3月30日

宮崎県都城市教育委員会

序 文

本書は平成5年度、民間の分譲住宅造成に伴い都城市教育委員会が受託事業として実施した都城市南横市町に所在する加治屋遺跡の発掘調査報告書であります。

この遺跡は、昭和63年の市道改良工事に伴う発掘調査によって、弥生時代の集落跡が発見されていますが、その北側にあたる今回の発掘調査でも当該期の竪穴住居跡をはじめとする遺構や弥生土器などの貴重な遺物が出土しました。

本書が当地域の歴史研究の一助となり、歴史教育の教材として生かされることを願っており
ます。

発掘調査から報告書作成に至るまで、日興建設には多大なご援助・ご協力をいただきました。
ここに心から感謝申し上げます。また、発掘作業および出土品整理にご協力いただきました作
業員の皆様に深く感謝申し上げます。

1996年3月30日

都城市教育委員会
教育長 隈 元 幸 美

例　　言

1. 本書は有限会社日興建設による分譲住宅建設に伴い、都城市教育委員会が平成6年10月4日から平成6年11月7日まで調査を実施した加治屋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地は宮崎県都城市南横市町2069番1ほか（字加治屋）であり、調査面積は587m²である。
3. 現場における遺構の実測および写真撮影は、作業員の協力を得て、都城市文化課主事・衆畠光博が行い、すべてのトレイスは衆畠があたった。
4. 本書使用のレベルは海拔絶対高であり、基準方位は遺構図面が磁北で、他は座標北である。
5. 本書の執筆と編集は衆畠が行った。
6. 出土遺物中、弥生土器については宮崎県文化課主査・石川悦雄氏の指導を受けた。
7. 発掘調査におけるすべての記録と出土遺物は、都城市立図書館内の文化財整理室に保管されている。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 調査の記録	4
1 調査の方法と概要	4
2 遺跡の層序	4
3 調査の記録	7
1) 縄文時代	7
2) 弥生時代	8
a. 造構と造構内出土遺物	8
b. 包含層出土遺物	16
3) 中世	21
4) 近世	23
第4章 まとめ	26
1 弥生土器の編年的位置づけ	26
2 弥生時代の集落について	29

挿図目次

図1 遺跡位置図	2
図2 遺跡周辺地形図	3
図3 調査区域図	5・6
図4 土層断面図	4
図5 縄文時代の遺物実測図	7
図6 造構分布図	9・10
図7 堪穴住居跡[SA1]実測図	11
図8 堪穴住居跡[SA1]内遺物分布図	12
図9 堪穴住居跡[SA1]内出土遺物実測図(1)	13
図10 堪穴住居跡[SA1]内出土遺物実測図(2)	14
図11 堪穴住居跡[SA1]内出土遺物実測図(3)	15
図12 堪穴住居跡[SA1]内出土遺物実測図(4)	16
図13 遺物分布図	17・18

図14 弥生土器実測図	19
図15 弥生土器・石器実測図	20
図16 遺構実測図	22
図17 中世遺物実測図	22
図18 近世石塔実測図	23
図19 加治屋遺跡(昭和62年度調査)1・2号住居跡出土土器	27
図20 加治屋遺跡(昭和62年度調査)3号住居跡出土土器(1)	28
図21 加治屋遺跡(昭和62年度調査)3号住居跡出土土器(2)	29

表 目 次

表1 土器観察表(1)	24	表2 土器観察表(2)	25
表3 報告書抄録	42		

写 真 目 次

写真1 近世石塔	23	写真21 剥片	37
写真2 航空写真	30	写真22 壊穴住居跡[SA1]出土壺	38
写真3 発掘調査風景	31	写真23 壊穴住居跡[SA1]出土壺	38
写真4 弥生土器出土状況	31	写真24 壊穴住居跡[SA1]出土鉢	38
写真5 壊穴住居跡[SA1]掘り下げ風景	32	写真25 壊穴住居跡[SA1]出土鉢	39
写真6 同上完了	32	写真26 壊穴住居跡[SA1]出土鉢・高坏	39
写真7 壊穴住居跡[SA1]土層断面	33	写真27 壊穴住居跡[SA1]出土高坏(外面)	40
写真8 壊穴住居跡[SA1]内遺物出土状況	33	写真28 壊穴住居跡[SA1]出土高坏(内面)	40
写真9 壊穴住居跡[SA1]床面精査状況	34	写真29 壊穴住居跡[SA1]出土石器	40
写真10 壊穴住居跡[SA1]完掘状況	34	写真30 壊穴住居跡[SA1]出土軽石加工品	40
写真11 調査区西側ピット列・土坑群	35	写真31 包含層出土手づくね土器	40
写真12 調査区東側ピット群・土坑群	35	写真32 包含層出土台付き鉢	40
写真13 道路状遺構[SF1]	36	写真33 包含層出土弥生土器	41
写真14 溝状遺構[SD1]	36	写真34 穿孔を有する土器	41
写真15 土坑[SC1]土層断面	36	写真35 包含層出土高坏	41
写真16 土坑[SC1]完掘状況	36	写真36 包含層出土特殊土器	41
写真17 土坑[SC2]	36	写真37 同左把手部分	41
写真18 土坑[SC3]	36	写真38 同上底部(穿孔有り)	41
写真19 繩文土器	37	写真39 中世土師器	41
写真20 細線羽状文土器	37	写真40 土坑SC2 出土土製品	41

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成6年6月13日、宮崎県都城市南横市町2069-2における開発行為を計画していた有限会社東方建設コンサルタントから都城市教育委員会へ文化財の有無の照会がなされた。これに対し、同市文化課は平成3年に当該地の試掘調査を行って、遺物包含層が良好に保存されていることを確認していたため、当該地が埋蔵文化財包蔵地内であると回答した。そして、6月13・14・16日にわたって、両者間で遺跡の取扱いについて協議がもたれた。同業者の予定している建売分譲住宅建設は、宅地部分を全体に盛土し、道路部分は、床掘りとアスファルト舗装を行うとのことで、後者の部分については、発掘調査によって記録保存する必要性が出てきた。その後、平成6年8月4日付けで有限会社東方建設コンサルタントから埋蔵文化財発掘の届出が提出された。さらに、平成6年9月16日に都城市教育委員会と同業者間で、道路部分の発掘調査による記録保存とその他の包蔵地を現状保存することや発掘調査と報告書作成は都城市が受託事業で実施するという旨を明記した「遺跡の取扱いに関する協定書」および「契約書」が取り交わされた。なお、現場における発掘調査は平成6年10月4日から平成6年11月7日まで行い、引き続き出土遺物の整理作業を実施した。また、報告書の作成は契約にもとづき平成7年度事業で実施し、平成7年度末に報告書刊行の運びとなった。

2 調査体制

発掘調査は以下の体制で行い、経費の運用は文化課であつた。

都城市教育委員会

教育長	隈 元 幸 美		
文化課 課長	松 山 充 (平成6年度)	遠 矢 昭 夫 (平成7年度)	
課長補佐	遠 矢 昭 夫 (平成6年度)	永 野 元 保 (平成7年度)	
係長	永 野 元 保 (平成6年度)	中 村 久 司 (平成7年度)	
庶務担当 主事	下 鶴 咲 子		
調査担当 主事	乗 畑 光 博		

発掘作業員

阿久根敏恵	吉村 則子	米村 正子	鴨 松雄	鴨 芳明	曾原 主吉
荒ヶ田安夫	重永 雄三	木下 栄子	東 千歳	有水 トミ	荒ヶ田エダ
吉原 オル	新田ハル子	釣崎トミ子	楠本礼エイ子	平川 樹高	和田 利雄
久留 保	東前 利雄	時吉ユキエ	瀬戸山久美子	下田代清海	

整理作業員

猪俣幸千代 池谷香代子 雁野あつ子

第2章 遺跡の位置と環境

都城市は九州島の東南部、宮崎県西南端の鹿児島県境に接した位置にある。地形的には都城盆地と呼ばれる南北に細長い楕円形の盆地中央部を占めている。

加治屋遺跡は、宮崎県都城市 南横市町2069-1（字加治屋）に所在し、大淀川の支流である横市川右岸のシラス台地の北縁部に立地する。

今回の調査地点の南側は、昭和63年に市道久味木・加治屋線の改良工事に伴って、道路幅が発掘調査され、弥生時代後期末の竪穴住居跡6基と周溝状遺構1基などが検出された他、住居跡内土坑内から木柄の残存した鉄斧が検出されている。また、先述したように、今回調査した地点については、平成3年8月3日から8月5日に試掘調査した結果、弥生時代後期の土器包含層が確認されている。

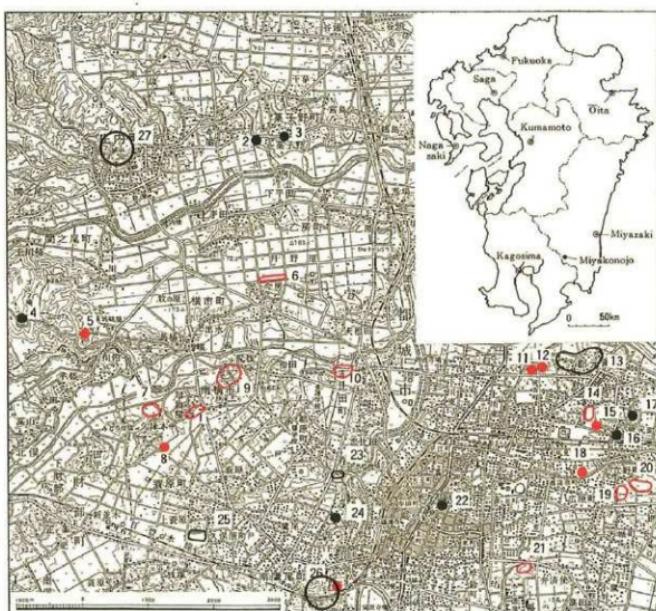


図1 遺跡位置図 ※赤は弥生時代関係遺跡

1. 加治屋遺跡
2. 庄内古墳
3. 葉子野地下式横穴墓群
4. 丸山遺跡
5. 母智丘原第1遺跡
6. 月原原第2遺跡
7. 中尾山・馬渡遺跡
8. 池原遺跡
9. 田谷・尻枝遺跡
10. 正坂原遺跡
11. 祝吉第1遺跡
12. 祝吉第2遺跡
13. 郡元地区遺跡群
14. 犀田ノ上遺跡
15. 池ノ友遺跡
16. 冲水2号墳
17. 祝吉御所跡
18. 年見川遺跡
19. 向原第1遺跡
20. 向原第2遺跡
21. 上ノ園第2遺跡
22. 柳川原遺跡
23. 二夕元遺跡
24. 都城古墳
25. 西原第2遺跡
26. 都之城跡
27. 安永城跡

ところで、当遺跡周辺には数多くの遺跡が確認されており、そのうちのいくつかは発掘調査も実施されている。

昭和60年に運動公園造成に伴って発掘調査された中尾山・馬渡遺跡では、円形に突出したシラス台地のほぼ全面約2ヘクタールを越える広大な調査面積のせいもあって、縄文時代から中世にかけての多岐にわたる遺構・遺物が掘り出されている。特に、縄文時代晚期の土坑と土器群ならびに平安時代の掘立柱建物跡と墨書き器・越州窯系青磁・綠釉土器の発見は注目される。また、昭和61年には、都城市内遺跡詳細分布調査に伴って、南横市町3888-1の畠（尻枝遺跡）が試掘調査され、柳描文の施された壺形土器の口縁部や磨製石鎌が出土し、弥生時代後期末～古墳時代初頭の集落跡と推定されている。



図2 遺跡周辺地形図

第3章 調査の記録

1 調査の方法と概要

発掘調査は造成予定地に「コ」の字形に入る道路建設部分である約587m²について実施した。

試掘調査によって確認していた弥生時代の遺物包含層は部分的にパッチ状に薄く堆積した桜島を噴出源とする灰白色を呈する降下軽石層（文明年間・1469～1486）と霧島御池を噴出源とする黄白色を呈する降下軽石（約4,200年前）に挟まれた黑色土であったため、本調査はその結果に基づき、桜島文明軽石直下までバックホーによって現代の耕作土や山林の腐植土を剥ぎ取った後、霧島御池軽石の上面まで手作業で掘り下げた。

なお、霧島御池軽石よりも下層については深掘りトレンチを入れて、地表下約3.5mの桜島起源の薩摩テフラ（約11,000年前）の下まで確認したが、遺物は検出できなかった。

2 遺跡の層序

調査区は基本的に、霧島御池軽石上面まで掘り下げたが、先述したように、より下位の文化層の存在を把握するためにB-6区に深掘トレンチを設定し、始良カルデラ起源入戸火碎流堆積物の二次堆積層上位まで確認した。そのトレンチの土層断面図を基本土層として、上から順に各層の説明をする。I層は、現代の畑の耕作土および、山林の腐植土層で、暗褐色砂質シルト層である。II層は、オリーブ黒色砂質シルト層で、3mm以下の灰白色の軽石粒を含む。III層は、1cm以下の灰白色軽石で、調査区区内に部分的に薄く堆積する。桜島起源の文明（1469～1486年）軽石とされる。IV層は基本的には黒色系の土層であるが、V層の霧島御池軽石までをさらに3層に細分した。IVa層は、黒色シルトで5mm以下の黄色軽石粒を微量含む。IVb層は、黒色シルトで5mm以下の黄色軽石粒を多く含む。IVc層は、黒褐色シルトで、かたくしまり、1cm以下の黄色軽石粒を多く含む。V層は、3cm以下の黄色軽石で、層厚1.1mを測る。霧島御池から約4,200年前に噴出したとされている。これより以下のテフラについては、VII層が鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰であり、その直上のVIII層は霧島古高千穂起源の牛のすね火山灰上部層が二次堆積したものと思われる。さらに、IX層とXI層の漸移帶に認められる0.8mm以下の黄色軽石濃集層（X層）が、桜島P11・桜島末吉軽石（約7,500年前）に該当し、部分的に残存するXIII層が桜島P14・薩摩テフラ（約11,000年前）である。

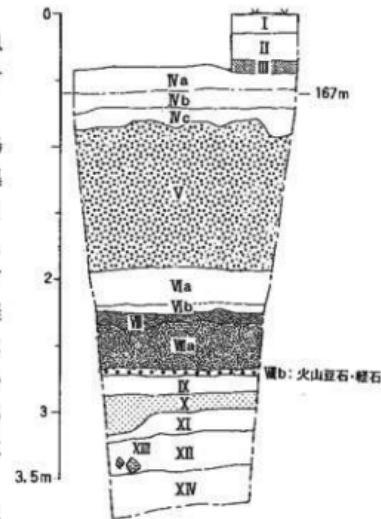
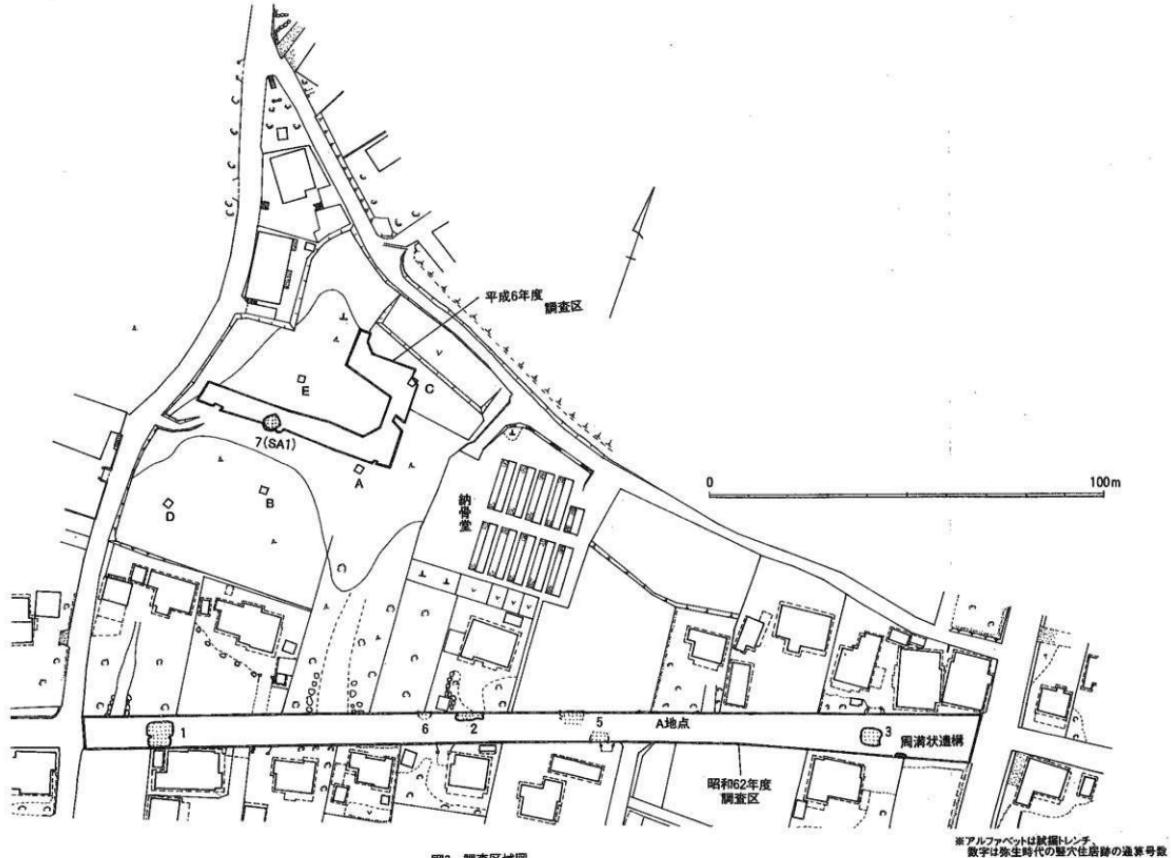


図4 土層断面図



3 調査の記録

1) 繩文時代

縄文時代の遺構は検出されなかったが、調査区域の東側において土器と剝片が出土した（図13）。出土層位は、基本的にIV b層であるが、一部、IV c層にくいこむように出土したものもある。図5の1は深鉢形の胴部である。内外ともにミガキ調整であるが、器壁はやや肉厚である。2は上げ底気味になる深鉢形の底部であろう。3は、鉢形で、屈曲した胴部の上半に二条の沈線とその上下に細線の羽状文が施されている。4～7は色調・胎土から同一個体と思われる。口縁部外面は凹線文が一条認められ、底部は上げ底となる。器面は全体的に丁寧な調整である。これらは、器面調整などから同一時期の土器群と思われ、鉢形土器の細線羽状文や浅鉢形土器の凹線文の存在から、縄文時代後期後葉の三万田式土器に該当するものと思われる。なお、石器は見られなかったが、同一層中から、安山岩質の剝片が1点（8）出土した。

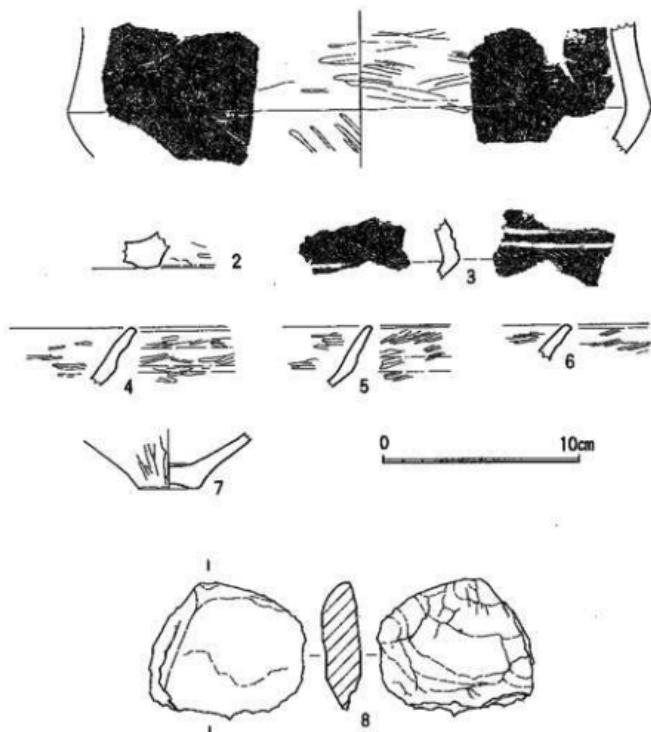


図5 縄文時代の遺物実測図

2) 弥生時代

a. 遺構と遺構内出土遺物

弥生時代の遺構としたものは、埋土が、基本土層のIV b層に該当するものである。竪穴住居跡1基とピット6基があるが、ピットは深さがいずれも10~20cm程度の浅いもので、壁の立上がりも不明瞭だったため柱穴跡かどうかは判別できなかった。なお、人為的な遺構ではないが、IV b層からV層の霧島御池軽石までが、直径1m程度、ほぼ円形に西向きに横転した箇所(SX1)があり、この時期(IV b層堆積時)の倒木痕と思われる(図17)。ちなみに前年(平成5年)の夏の台風によってこの周辺の杉林の多くが倒れてしまっているが、それらの倒木方向も西向きがほとんどである。

竪穴住居跡(SA1)は、V層である霧島御池軽石の上面のコンターラインを重ねると、調査区内において最も高い面に掘り込まれている。平面プランが一辺約4mの正方形を呈しており、検出面からの深さは約0.4mである。埋土はおおよそ4枚程度に細分が可能であり、次第に埋まっていた過程を見ることができる(図7)。上から述べると、aは黒色シルトで、基本土層のIV a層と一致する。bは黒色シルトで、黄色軽石を含む。cは黒色シルト土で、黄色軽石を多く含む。基本土層のIV b層に該当する。遺物の大半はこの層に包含されている。出土した土器の中には、周辺のIV b層の出土土器と接合したもの(12・22・27)もあり、住居跡内出土土器は、住居廃棄時に置き去られたものではなく、住居が埋まっていく過程で、その隙間に周囲から流れ込んで集積した可能性が高い。dは、黒褐色シルト土で1~3cm程度の黄色軽石を多く含み、全体的にザラついた感触があり、かたくしまる。住居の壁ぎわを中心に堆積している。屋内施設としては土坑と柱穴と思われるピットが検出されている。土坑は、中央部に2基、壁ぎわに3基がある。中央土坑には切り合いが認められ、東側の土坑は、西側の土坑を黒褐色シルト土で埋め戻してから掘られている。前者の土坑の底面は凹凸が激しい。西側の土坑は、断面をたち割って観察した結果(図7)、竪穴掘削の荒掘りの際のくぼみを黄色軽石を多く含む灰オリーブ土で充填して整形したものであることが判明した。

また、西側土坑の埋土上面と、東側土坑の北側床面は、20~30cmの範囲が赤色化しており、火を受けた可能性がある。地床炉としての機能が想定されよう。主柱穴と思われるピットは、東側の中央土坑の中とその北側床面に、径15cm・深さ15cm程度のものが、2基検出された。これに対し、壁ぎわのピットはいずれも深さ5cm以下であり、柱穴の可能性は少ない。なお、住居の北側コーナー付近に50cm×35cm×20cm程度の大きさの灰白色を呈する木灰状物質(粘土かもしれない)が認められた。

次に、住居跡内出土遺物について述べる。遺物には土器・砥石・加工痕のある軽石・炭化木片がある。土器には、壺形(以下壺とする)・壺形(以下壺とする)・鉢形(以下鉢とする)・高壺形(以下高壺とする)などの器種がある。9~11は、壺である。9は、頸部から口縁部の断面形態が、ゆるやかなS字状をなし、頸部外面にはヘラ状の工具によって押さえられたと思われる痕跡が認められる。また、口縁上端は弱く波打っている。10も9と同じような壺の口縁部である。11は口縁部先端がシャープに仕上げられている。12~16は、壺である。12・13は

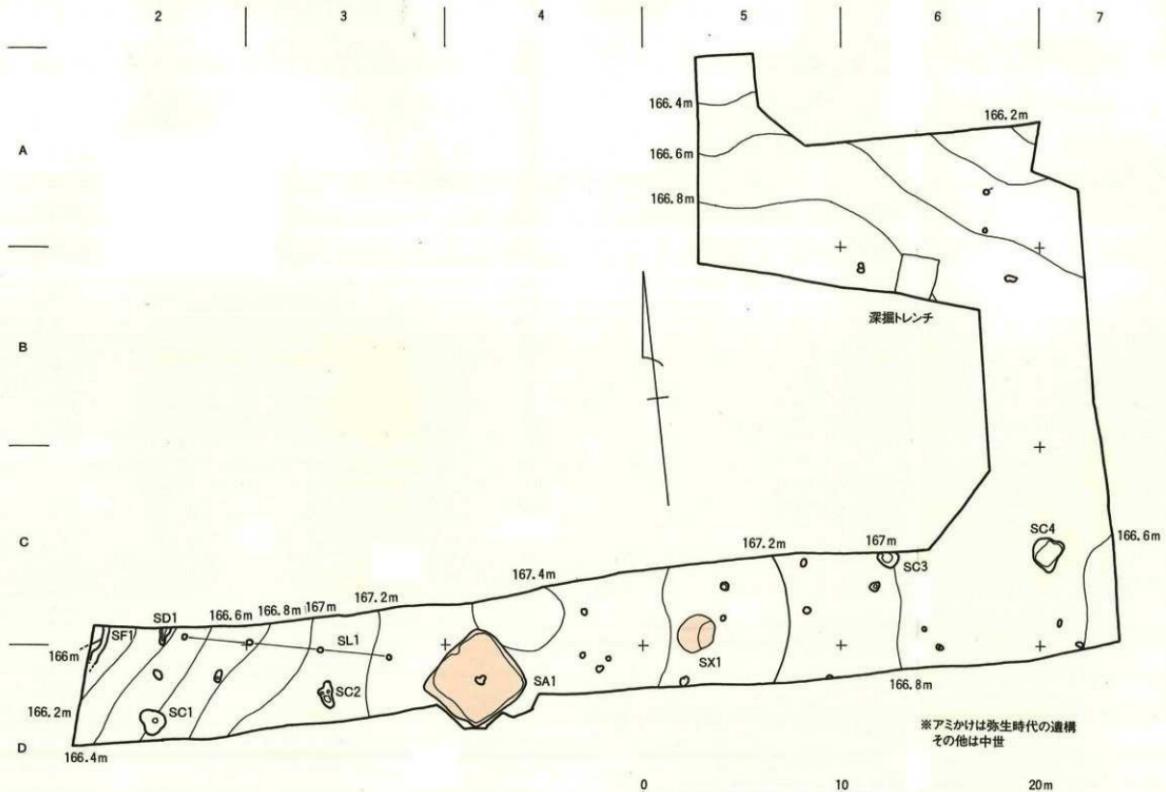


図6 造構分布図

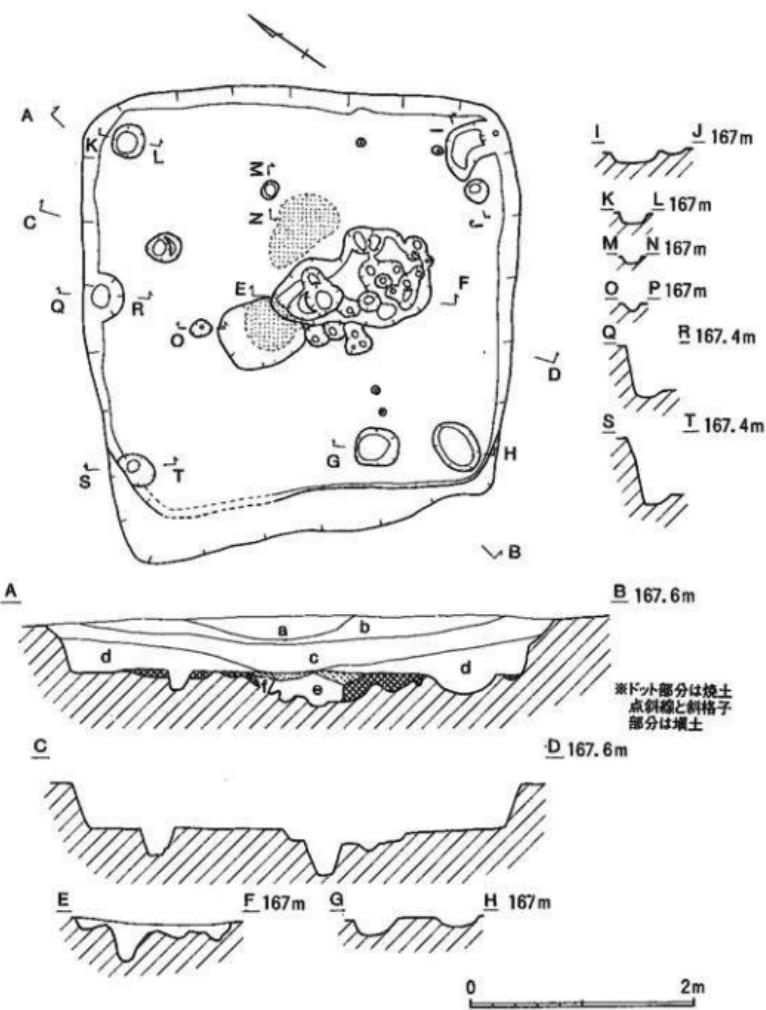


図7 壁穴住居跡[SA1]実測図

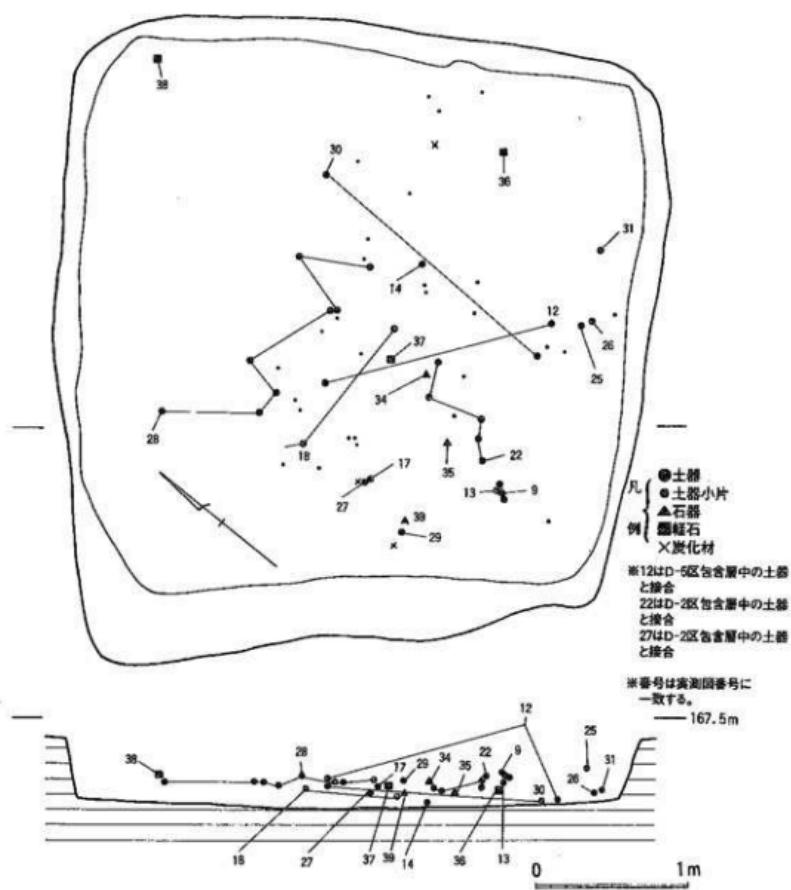


図8 聖穴住居跡[SA1]内 遺構分布図

壺の底部である。12は、下方に向かってすぼまり、底面は平坦に仕上げられている。また、内面にはユビオサエ痕が明瞭である。13の底面はレンズ状に膨らむ不安定なものである。14~16の器壁の厚さは5mm以下と比較的薄く仕上げられている。14と15の外器面は丁寧なミガキ調整であるが、16にはハケメ調整が認められる。これらはいずれも小形の精製壺と思われる。

17~27は、鉢である。この中の17~21は、小形の壺のような形態をなしているが、17と18の外器面にはミガキ状の丁寧な調整が施されている。砲弾形の器形をなす22は、外器面にもミガキ調整が認められるが、胴部上半にはススの付着が顕著で、口縁部内面にも一部コゲ付き状の炭化物の付着が認められる。煮沸に用いられたのであろう。24~27は、皿状の浅い鉢であり、胴

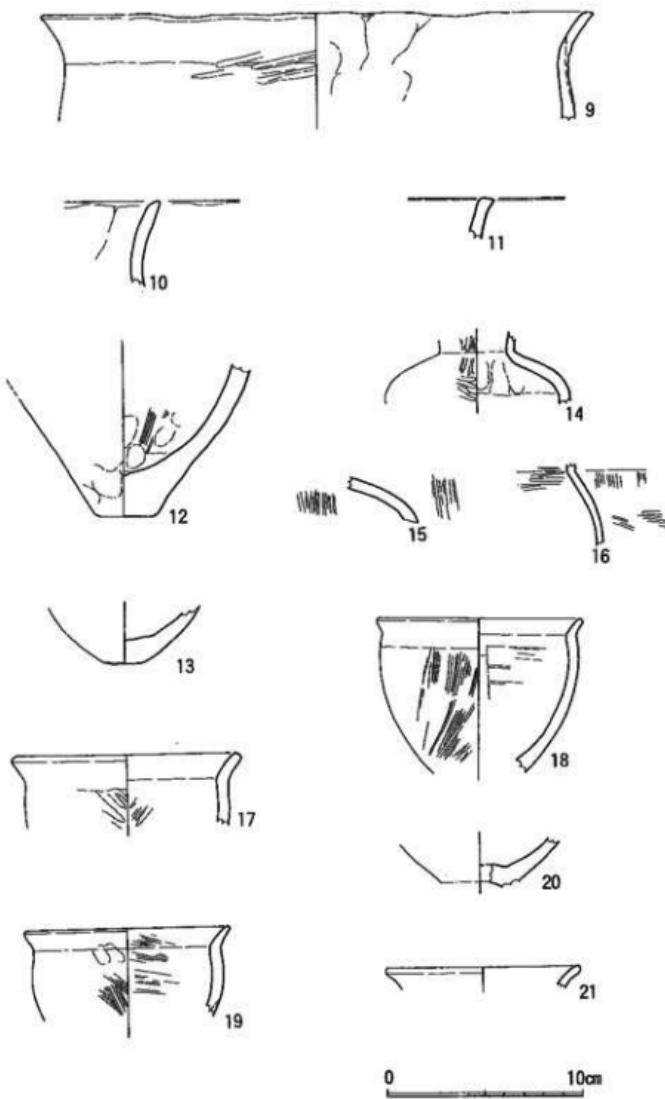


図9 整穴住居跡[SA1]内出土遺物実測図(1)

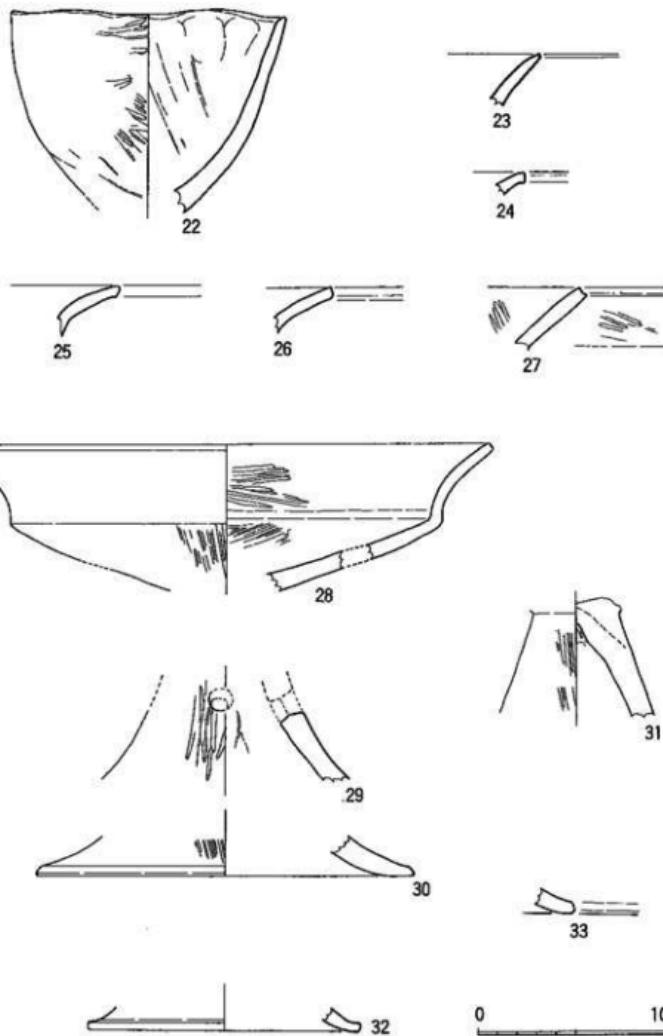


図10 積穴住居跡[SA1]内出土遺物実測図(2)

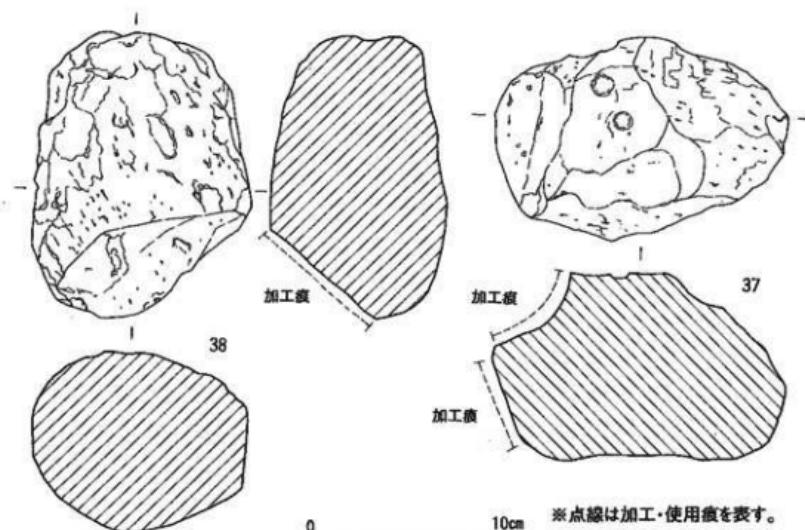
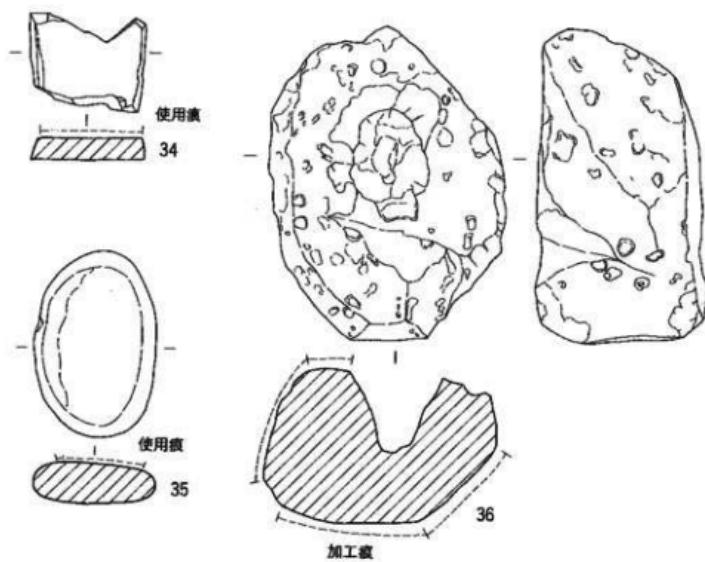


図11 竪穴住居跡[SA1]内出土遺物実測図(3)

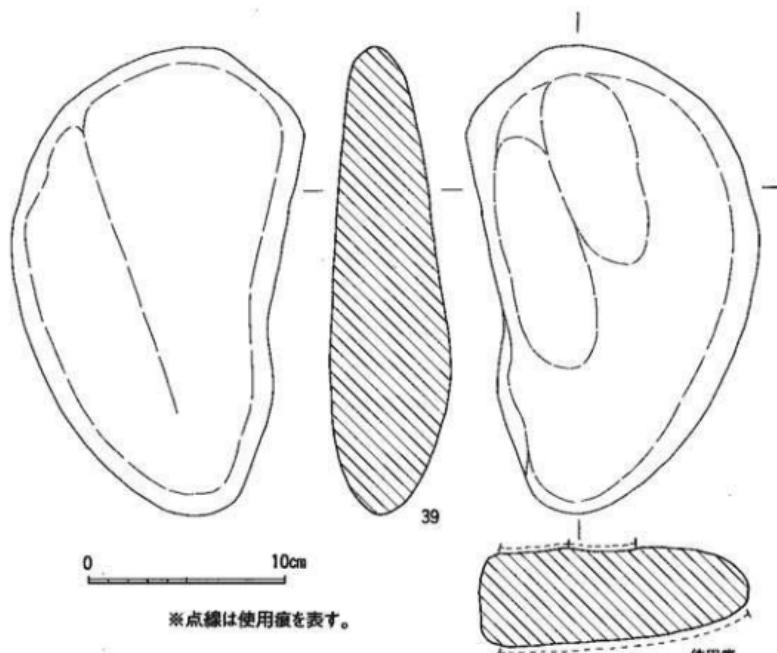


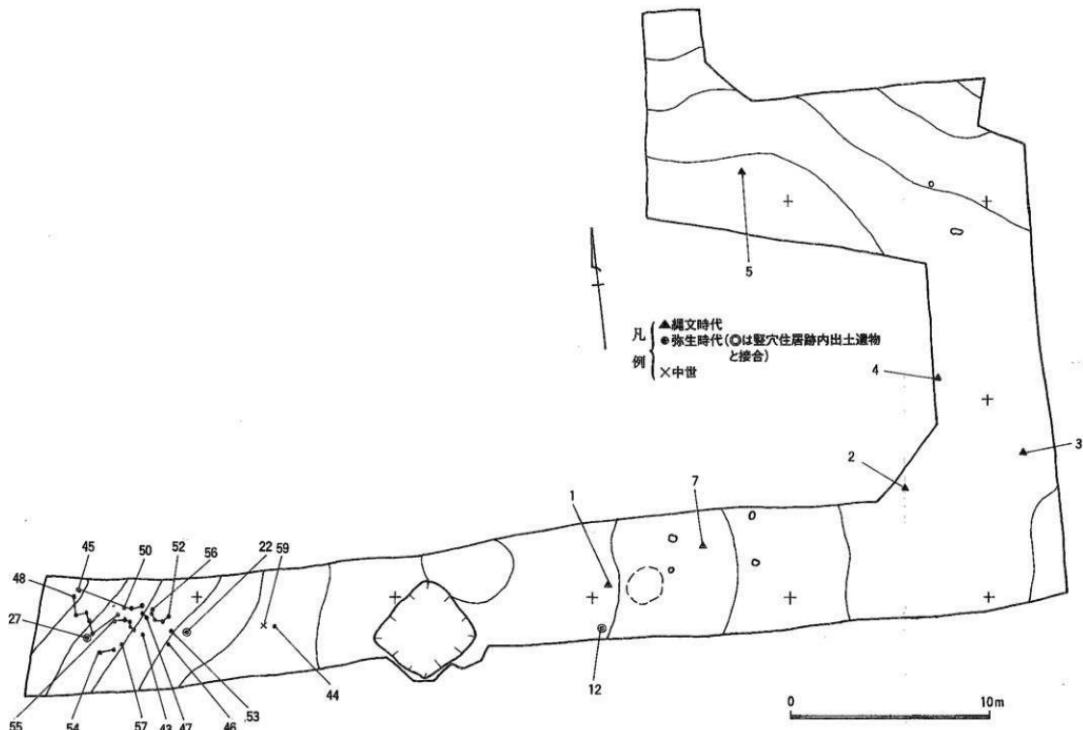
図12 整穴住居跡[SA1]内出土遺物実測図(4)

部から口縁部にかけて大きく外へ開く断面形態をなす。おおむねナデ調整であるが、27にはミガキが認められる。28~33は、高坏である。28~30は同一個体になるものと思われるが、接合しない。28は外面の屈曲部以下に縦方向のハケメのち丁寧なナデ調整が施されており、30の脚部据にもやはり縦方向のハケメが認められる。また、29の脚部には完存していないが、焼成前に両側からあけられた円形のスカシがある。

34・35・39は砂岩製の砥石である。34の砥面は激しく使い込まれたせいか光沢がある。39は、実測図右面に二条の並列した溝状の底面が認められ、同左面は全面を広めに砥面としている。36~37は加工痕のある軽石である。36は周囲を粗い研磨によって面取りした後、一か所にくぼみが彫られている。36・37も粗い研磨によって面取りされている。いずれも用途は不明である。

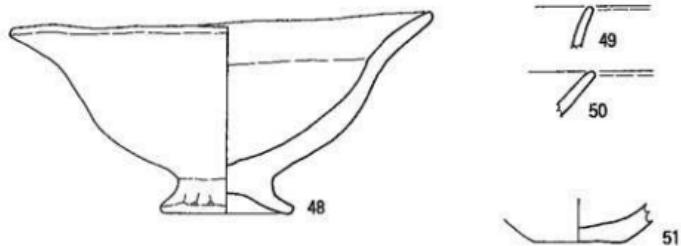
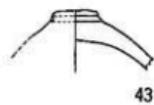
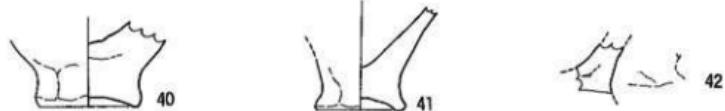
b. 包含層出土遺物

調査区域の西端であるC・D-2区のIVb層中から、弥生時代の土器が集中的に出土した。この地点は台地面が西側へ向けて急激に傾斜し始める部分にあるが、その範囲では明確な構造を検出することはできなかった。ここで出土した上器群には完形に近い資料も認められる。40~42は、甕の底部である。40・41とともに粘土紐の貼り付けによって脚台部を作りだし、上げ底状の底部となっている。また、脚部外面にはユビオサエの痕跡が認められる。43は蓋と思われるが、



番号は実測図番号に一致する。

図13 遺物分布図



0 10cm

図14 猿生土器実測図

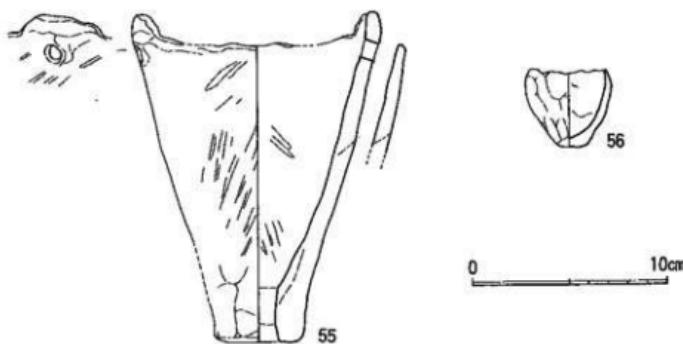


図15 弥生土器・石器実測図

*点線は使用痕を表す。

口縁部を欠失しているため断定はできない。天井部には、円盤状の突起が貼り付けられ、焼成前に直径4mmの孔が穿ってある。44と45は壺である。44は中形壺と思われる。口縁部先端が外反する。45は比較的小形の壺であり、球形の胴部をなす。46~51は鉢である。47の器壁は薄手で、口縁部は明瞭な稜線をもって外反する。これに対して、48は比較的厚手であり、口縁部は内面に鈍い稜線をもって極端に外反し、底部には脚台が付けられている。52~54は高壺である。52と53は口縁部が極端に外反する。52の屈曲部外面には突帯が貼り付けられ、断面は三角形状を呈する。54の口縁部は屈曲部からさらにもう一段外反する。55は口縁部の二か所に突起が貼り付けられ、おそらく内側から開けられた直径7mmの焼成前の穿孔がある。また、底部にも焼成前の孔が開けられ、漏斗状の形態を呈している。56は、いわゆる手づくねの小形土器である。外面はユビオサエの痕跡が明瞭である。57は砂岩を利用した砥石である。

3) 中世(図17)

遺構は調査区域内において、まんべんなく検出されているが、それに伴う遺物は極端に少なかった。検出された遺構には、道路状遺構1条、溝状遺構1条、土坑4基、ピット列1条、ピット16基がある。なお、それぞれの関連性については、調査面積が狭小なため不明である。

道路状遺構(SF1)はおおむね北北東~南南西方向の幅約0.9m・深さ約0.18mの溝状遺構の底面が硬化しているもので、硬化面の幅約0.3mである。南端が、調査区域外へと続くため全容は不明確であるが、やや蛇行しているようである。覆土は、黄色軽石を微量含む黒色粘質シルトであるが、当該遺構が完全に埋没した後に桜島文明軽石が堆積している。

溝状遺構(SD1)も南端が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、ここでは一応溝状遺構として扱っておく。幅約0.52m・深さ約0.64mを測り、黒色シルト(黄色軽石を微量含む)である覆土の上位に桜島文明軽石がうすく堆積している。

4基検出された土坑はいずれも平面プランが不整形である。覆土によって、IVa層を主体とするSCI・SC2が古く、II層を含むSC3・SC4がより新しいと考えられる。とりわけ、後者は近世に下る可能性もある。

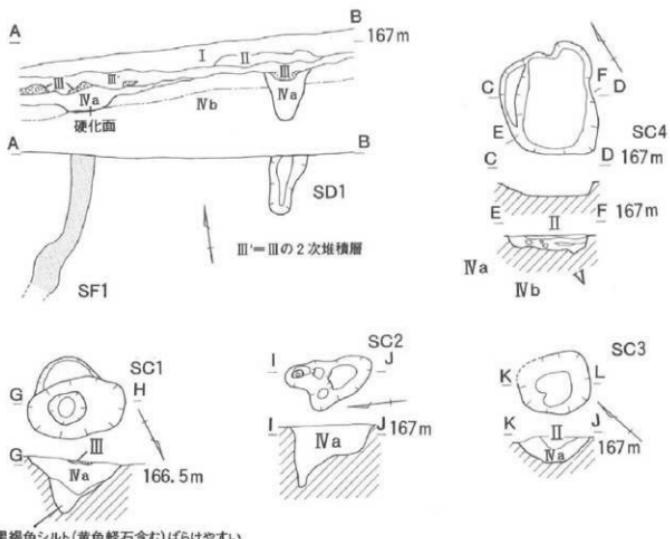
土坑SC1は、長径1.4m・短径0.84mの梢円形プランを呈し、中ほどに稜をもつ逆円錐形状の断面形態をなす。覆土最上部に桜島文明軽石がごくうすく堆積している。

土坑SC2は、長軸1.25m・短軸0.7mの不整形プランで、断面は長軸の片方が深くなる特徴的な形態を呈する。覆土中から、性格不明の土製品が1点出土している(58)。

土坑SC3は、1m×0.85mの隅丸方形プランを呈し、断面形態はすり鉢状となる。覆土上半にII層が堆積している。

土坑SC4は、1.4×1.3mの隅丸方形プランを呈し、北西辺の壁面に段をもつ。覆土はII層からV層までの土層がブロック状に堆積しており、自然埋没ではなく、人為的に埋め戻された可能性がある。

ピット列(SL1)は、3.3~3.5m間隔で、斜面の傾斜方向に並んでいる。ピットの直径は0.2~0.3mであり、ピット内堆積土はIVa層に該当する。傾斜面にあるため、建物の柱跡とは考えられない。ここでは、柵跡の可能性を提示しておく。



黒褐色シルト(黄色軽石含む)ばらくやすい

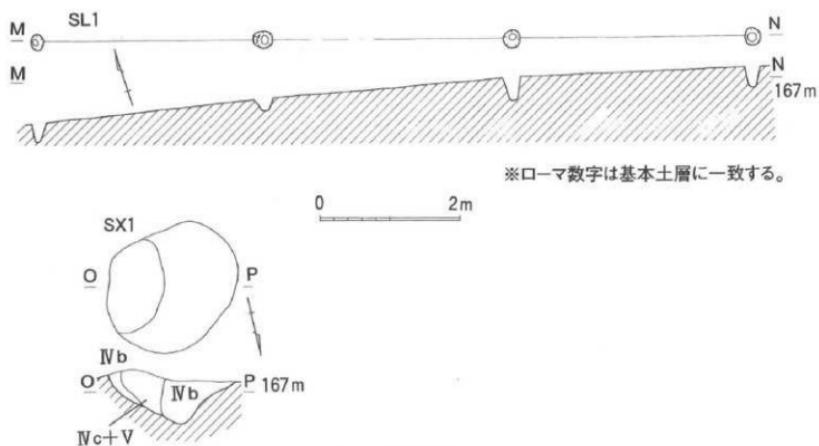


図16 遺構実測図

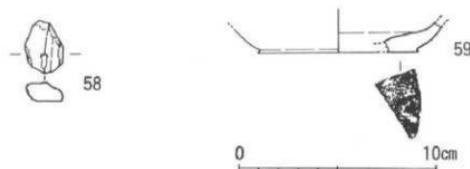


図17 中世遺物実測図

4) 近世

調査区域内においては、確実に近世に属すると認められる遺構は皆無であった。しかし、重機による表土剥ぎの際に、調査区北側（A-4区付近）に古石塔が3基転がっているのが確認された。2基はギョウカイ岩を加工したもので(60,61), 1基は自然石（砂岩）に文字を刻んだものである(62)。頭部が尖る将棋の駒形の60には宝暦12年（1762）という年号が刻まれ、沈線内とすべての文字内が赤く塗られている。石質は軽石に近い軟質のギョウカイ岩である。対して、頭部が隅丸形で底部に基壇のほぞ穴に据え付ける際の突起を作り出す61には明和9年（1772）と年号が刻まれており、石質はやや硬質のギョウカイ岩である。右側面には音原兵三という俗名も刻まれている。本調査区の北側、すなわち、舌状台地端部には、古墓があったが、後に現在の納骨堂に改葬されたようである。これらの石塔はその際に現地に取り残された石塔と思われる。この一帯に江戸後期の集団墓地がつくられていたのであろう。

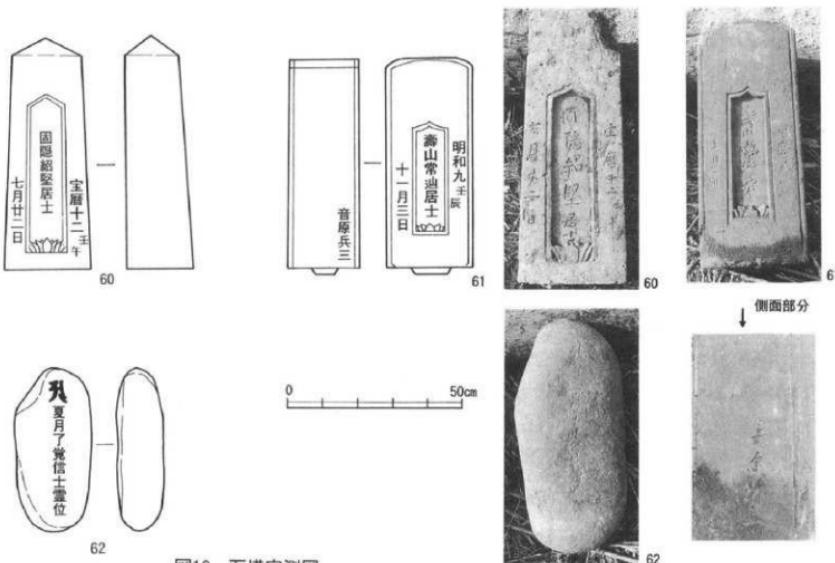


図18 石塔実測図

写真1 近世石塔

表1 土器観察表(1)

番号	出土区	遺構番	器種	色調		調整		胎土砂粒	取上番号	備考
				外	内	外	内			
1	C-5	IVb	深鉢	にぶい黄橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	1mm以下	63	
2	C-6	IVb	深鉢	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	3mm以下	85	
3	C-7	IVb	鉢	黒褐	灰褐	ミガキ	ミガキ	2mm以下	86	
4	B-6	IVb	浅鉢	褐	にぶい褐	ミガキ	ミガキ	1mm以下	88	
5	A-5	IVb	浅鉢	黒褐	にぶい褐	ミガキ	ミガキ	1mm以下	92	
6	A-6	IV	浅鉢	にぶい褐色	にぶい褐	ミガキ	ミガキ	1mm以下		
7	C-5	IVb	浅鉢	灰黄褐	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	2mm以下	66	
9	D-4.5	SA1	甕	淡黄スス付	淡黄	ナデ	ナデ	3mm以下	120~122	
10	D-4.5	SA1	甕	灰黄スス付	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	2mm以下		
11	D-4.5	SA1	甕	灰白スス付	淡黄	ナデ	ナデ	2mm以下		
12	D-4.5	SA1	壺	灰白	浅黄橙	ナデ	ナデ	3mm以下	64, 128, 145	
13	D-4.5	SA1	壺	にぶい橙	橙	ミガキ	ナデ	3mm以下	160	
14	D-4.5	SA1	壺	橙	にぶい橙	ミガキ	ナデ	1mm以下	102	
15	D-4.5	SA1	壺	橙	灰	ミガキ	ハケメ12本/cm	1mm以下		
16	D-4.5	SA1	壺	浅黄	灰白	ハケメ12本/cm	ナデ	1mm以下		
17	D-4.5	SA1	鉢	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	3mm以下	150	
18	D-4.5	SA1	鉢	にぶい橙	橙	ハケメ14本/cm	ナデ	2mm以下	110, 143	
19	D-4.5	SA1	鉢	浅黄橙	浅黄橙	ハケメ12本/cm	ナデ	3mm以下		
20	D-4.5	SA1	鉢	赤褐	にぶい赤橙	ナデ	ナデ	2mm以下		
21	D-4.5	SA1	鉢	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	2mm以下		
22	D-4.5	SA1	鉢	にぶい黄スス付	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	3mm以下	50, 112, 114, 118, 119	
23	D-4.5	SA1	鉢	淡黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	2mm以下		
24	D-4.5	SA1	鉢	灰白	灰白	ナデ	ナデ	2mm以下		
25	D-4.5	SA1	褐灰	浅黄橙	ナデ	ナデ	3mm以下	125		
26	D-4.5	SA1	鉢	浅黄橙	灰白	ナデ	ナデ	3mm以下	126	
27	D-4.5	SA1	鉢	浅黄橙	浅黄橙	ミガキ	ミガキ	2mm以下	11, 158	
28	D-4.5	SA1	高坏	灰黄橙	灰黄	ハケメ8本/cm	ミガキ	2mm以下	95, 107~109, 137~140	
29	D-4.5	SA1	高坏	灰黄	灰	ミガキ	ナデ	3mm以下	151, 152	
30	D-4.5	SA1	高坏	淡黄	淡黄	ハケメ8本/cm	ナデ	3mm以下	96, 131	
31	D-4.5	SA1	高坏	浅黄橙	浅黄橙	ハケメ8本/cm	ナデ	3mm以下	127	
32	D-4.5	SA1	高坏	灰白	淡黄	ナデ	ナデ	3mm以下		
33	D-4.5	SA1	高坏	にぶい黄橙	灰	ナデ	ナデ	2mm以下		

表2 土器観察表(2)

番号	出土区	造様層	器種	色調		調整		胎土砂粒	取上番号	備考
				外	内	外	内			
40	D-2	IV b	甕	にぶい黄橙	灰	ナデ	ナデ	2mm以下		
41	採集		甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3mm以下		
42	D-2	IV b	甕	にぶい赤褐	灰	ナデ	ナデ	2mm以下		
43	D-2	IV b	蓋?	にぶい橙	明赤褐	ハケメ6本/cm	ナデ	2mm以下	35	
44	D-2	IV b	壺	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3mm以下	54	
45	C,D-2	IV b	壺	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	3mm以下	27,36,72	
46	D-2	IV b	鉢	にぶい黄橙	灰白	ナデ	ナデ	3mm以下	48	
47	D-2	IV b	鉢	浅黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	2mm以下	37,39	
48	D-2	IV b	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3mm以下	3,4,6,7,10,23	
49	D-2	IV b	鉢	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	3mm以下		
50	D-2	IV b	鉢	灰白	灰白	ナデ	ナデ	2mm以下	27	
51	C-3	IV b	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3mm以下		
52	D-2	IV b	高坏	浅黄橙	浅黄	ナデ	ナデ	3mm以下	21,27,28,39~43,76,78	
53	D-2	IV b	高坏	浅黄橙	浅黄	ナデ	ミガキ	3mm以下	47	
54	D-2	IV b	高坏	浅黄橙	灰白	ミガキ	ミガキ	3mm以下	13,15	
55	D-2	IV b	特殊	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3mm以下	17,25,27,30,33,34	
56	D-2	IV b	手づくね	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ユビオサエ	ユビオサエ	2mm以下	40	
58	D-3	SC2	不明	明褐	明褐					
59	D-3	III	坏	にぶい黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	0.5mm以下	53	

第4章 まとめ

1 弥生土器の編年的位置づけ

堅穴住居跡 S A I 出土土器が包含層出土土器と接合することは前章3-2)-aで詳述した。すなわち当調査区内の包含層 (IVb層: 黒色シルト土) の堆積時期と堅穴住居跡 S A 1 の埋没時期がほぼ同時期であったことを示しているものと思われる。したがってこれらの土器群をほぼ同時期の資料ととらえ、器種別にそれらの特徴を確認した上で、既編年案に照らしながらその編年的位置づけを考えてみたい。

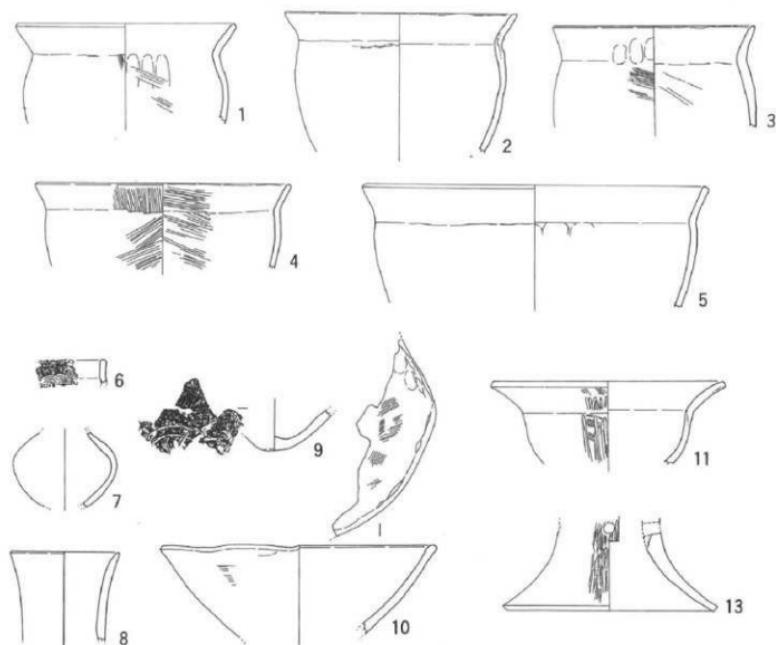
まず、壺は頸部がゆるくくびれ、弱い「S」字状をなし、口唇部は外端部を若干尖らせながら、平坦面をつくる。底部はつまみ出しによって上げ底状となるものと思われる。壺は底面が凸状にふくらむすわりの悪い形態で、小形の精製壺は球形胴部に直立する口縁部をもつ。鉢は口縁部～胴部が砲弾形をなす単純な形態のほか、口縁部が「く」の字に外反する小形の壺というべき器形のもの、そして、長めの口縁部が外反し、脚台を有するものなどがある。高坏は坏部の中ほどで屈曲し、反転しながら口縁部へ続くタイプと、屈曲部外面が三角突帯状になるタイプがある。脚部は据部近くで大きく外へ開くが、段や稜をもたず、中ほどに円形のスカシがある。また脚裾部は長めの接地面を有し、脚部先端は丸くおさまる。

以上のような諸特徴は石川悦雄氏の作成した弥生土器編年の後期後半～終末期 (V・VI期) に含まれると思われる (石川1984)。さらに高坏に着目すると、坏部はやはり石川の分類のA 2種、脚部は同分類のA 2類にそれぞれ該当する (石川1990)。また、その組み合わせは、石川の設定した高坏 A V類に相当し、弥生時代後期後半の最終段階 (3期) に位置づけられる。従って、いわゆる庄内併行期まで下ることはないものと思われる。

今回の出土土器と比較するために、調査地点が異なる昭和62年度調査の際に出土した土器群を掲げた (図19~21)。図示したのは土器がまとまって出土した3基の堅穴住居跡 (1~3号住居跡) 覆土中の一括資料と A 地点の埋納遺構出土資料である。この中で1号住居跡と3号住居跡からは、同一手法で描かれた線刻土器 (図19-9、図20-15) が出土しており、両遺構出土土器は、ほぼ同一時期のものと考えられる。また、両遺構出土の壺の口縁部形態は、おおむね比較的明瞭な「く」の字を呈するもの (図19-1, 2, 4 図20-1, 2) である。壺はいずれも底部が凸状にふくらむ不安定なもので、口縁部は単純な外反口縁の他に、肩部に刻目突帯をもつもの (図20-7)、櫛引き波状文をもつ複合口縁のもの (図19-6、図21-1) もある。高坏は、坏部が見あたらないが、1号住居跡と3号住居跡からは脚部が出土しており、残存状態の比較的良好な前者 (図19-13) は、先に紹介した石川分類の脚部 A 1類に該当する。このような一連の特徴の中で、特に壺の口縁部形態と高坏の脚部形態は先に述べた今回の調査資料とは異なっており、時期差を示すものと思われる。ここでは、昭和62年度調査資料を今回の調査資料よりも一型式ほど古くに位置づけたい。

引用文献

- 石川悦雄1984「宮崎平野における弥生土器編年試案 - 素描 (Mk. II)」『宮崎考古』第9号 宮崎考古学会
石川悦雄1990「弥生時代後期後半から古墳時代の土器編年むけて - 予察 I 高坏」
『宮崎総合博物館研究紀要』第15輯 宮崎総合博物館



1~13: 1号住居

14: 2号住居

15~17: A地点

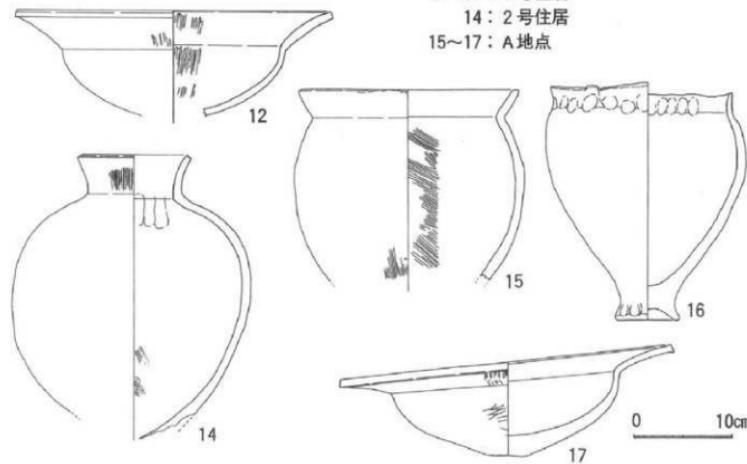


図19 加治屋遺跡1・2号住居跡他出土土器

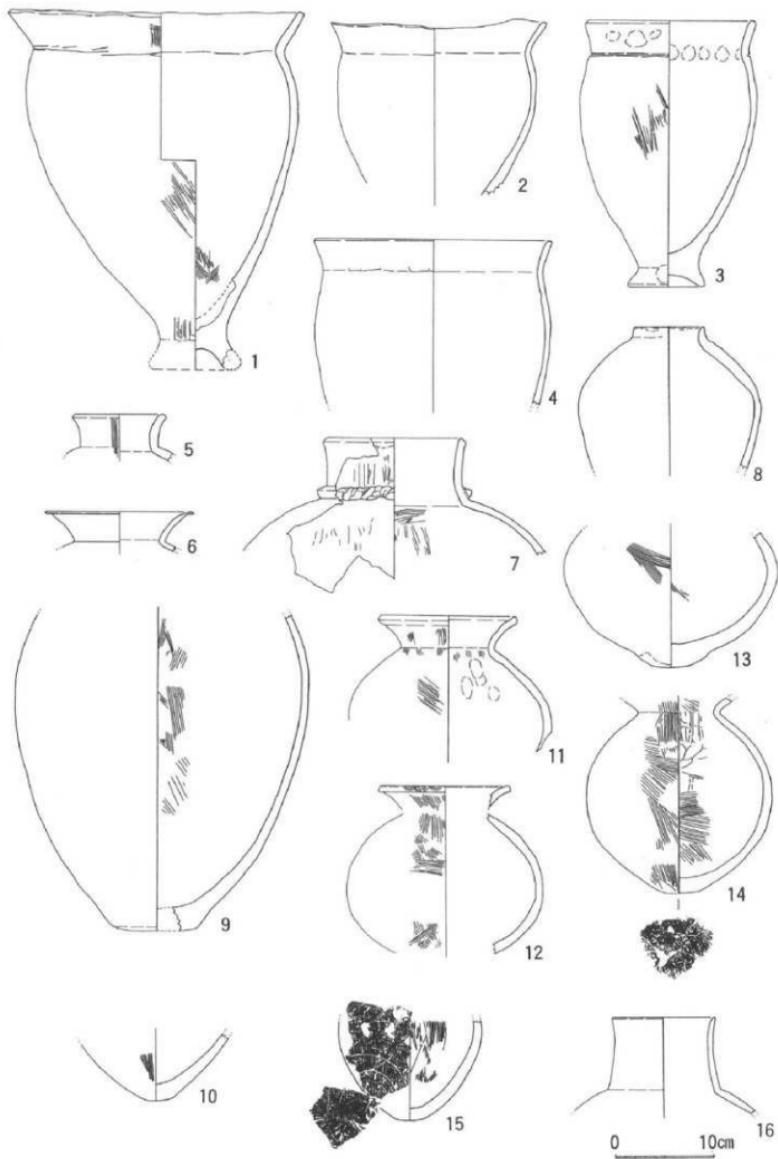


図20 加治屋遺跡 3号住居跡出土土器(1)

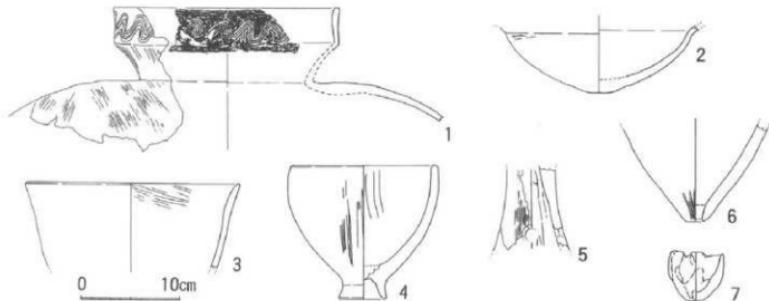


図21 加治屋遺跡 3号住居跡出土土器(2)

2 弥生時代の集落について

加治屋遺跡の弥生時代集落の推定範囲であるが、市道改良工事に伴う昭和62年度調査によつて、東は3号住居跡と周溝状遺構の検出された地点まで、加治屋の交差点よりも東へは広がらないようであり、西も1号住居跡の検出された地点までの東西約200mの範囲に限定されるようである。また、南側については今のところ発掘調査例がないために不明瞭であるが、畑地表面の土器の散布状態からして、昭和62年度調査区から50m以上も南側へは広がらないものと思われる。一方北側は、今回の平成6年度調査によって竪穴住居跡SA1が検出された地点、すなわち、シラス台地の北へ下っていく傾斜変換点の手前あたりまで（昭和62年度調査区から北へ80m）である。そうなると、南北は約130mの範囲に限定できる。しかし、先に示した土器の編年的位置づけからすると、北側の竪穴住居跡SA1の埋没年代は昭和62年度調査による南側の住居群に比べ、一段階ほど新しくなるようであり、弥生時代後期末の中で若干の時期差が認められる。すなわち、それによって集落の範囲に多少の変動があった可能性がある。

次に、本遺跡が立地する糞原台地における現在までに調査された弥生時代の遺跡の成果をもとに、弥生時代集落の変遷過程をみてみよう。ちなみに、糞原台地は地形区分上はいわゆる成層シラス台地に属し、標高は平均して165m前後の起伏の少ない平坦な地形面である。

今のところ、当台地上で前期に属する遺跡は確認されていないが、横市川右岸の低地面に挟まれた中位段丘上に立地する正坂原遺跡で、前期後半の突帶文系甕が少量出土している。

中期前半の事例は、台地北縁部の中尾山・馬渡遺跡で遺構には伴っていないものの比較的まとまった土器群が見つかっている。続く、中期後半は、台地西側の池原遺跡で遺物の出土量は少ないので、須玖式系の彩文壺などが出土している他、台地東端に位置する都之城跡主郭部の竪穴住居跡(SA1)からも良好な資料が出土している。

本報告書で紹介した加治屋遺跡は台地北縁部に立地するが、後期後半～末に属する竪穴住居跡が合計7軒検出され、周溝状遺構1基も確認されている。また、その東方約1kmに所在する尻枝遺跡や先述した中尾山・馬渡遺跡でも当該期の遺物が出土している。前代と比較すると、この時期には出土土器の量・ヴァリエーションが豊富となるだけでなく、遺構群が明瞭となり、遺跡の数も多くなるようだ。



写真2 航空写真(中央やや左が発掘調査地点)



写真3 発掘調査風景

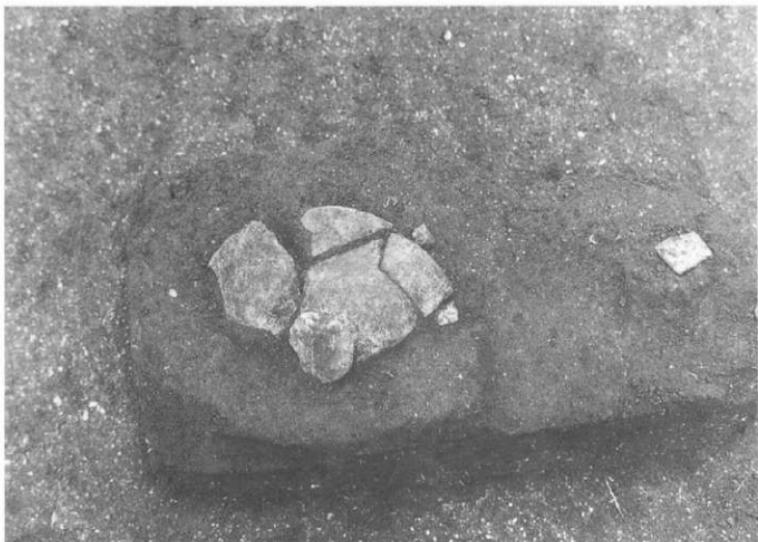


写真4 弥生土器出土状況



写真5 壁穴住居跡(SA1)掘り下げ風景



写真6 同上完了

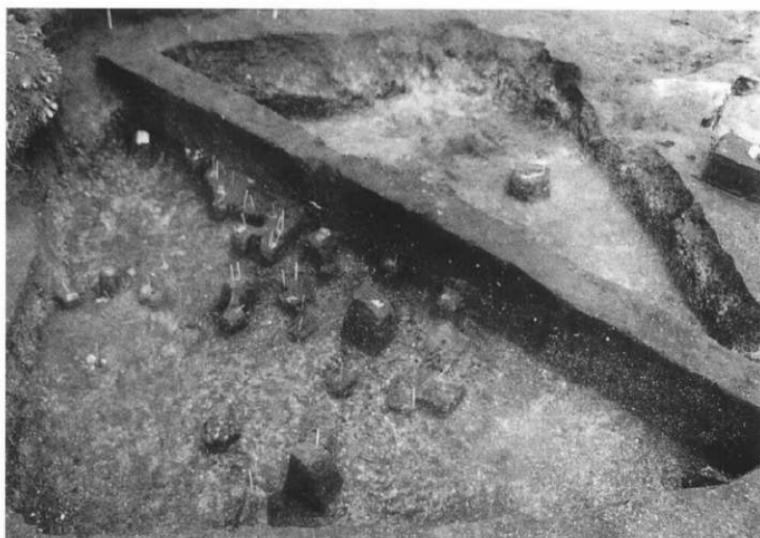


写真7 穂穴住居跡(SA1)土層断面



写真8 穂穴住居跡(SA1)内遺物出土状況



写真9 穫穴住居跡(SA1)床面精査状況



写真10 穫穴住居跡(SA1)完掘状況



写真11 調査区西側 ピット列・土坑群



写真12 調査区東側 ピット群・土坑群



写真13 道路状遺構 (SF1)



写真14 溝状遺構 (SD1)



写真15 土坑 (SA1) 土層断面

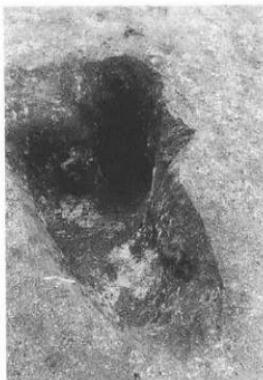


写真17 土坑 (SC2)

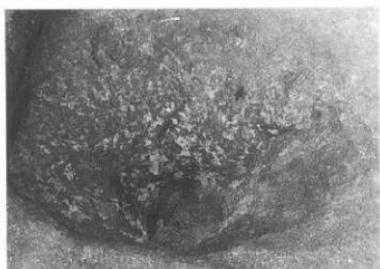


写真16 土坑 (SC1) 完掘状況



写真18 土坑 (SC3)

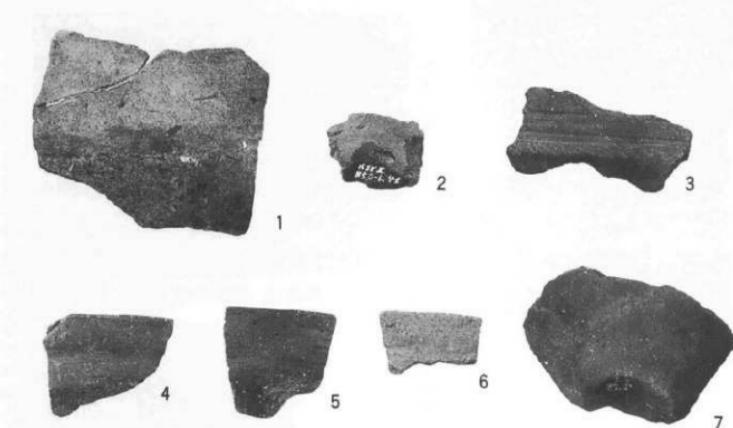


写真19 繩文土器

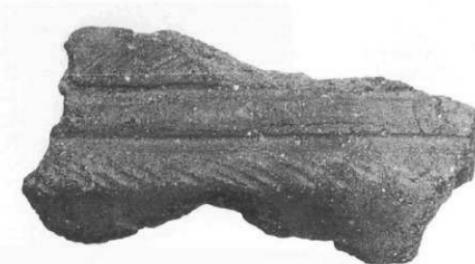


写真20 細線羽状文土器 (3)



写真21 剥片 (8)

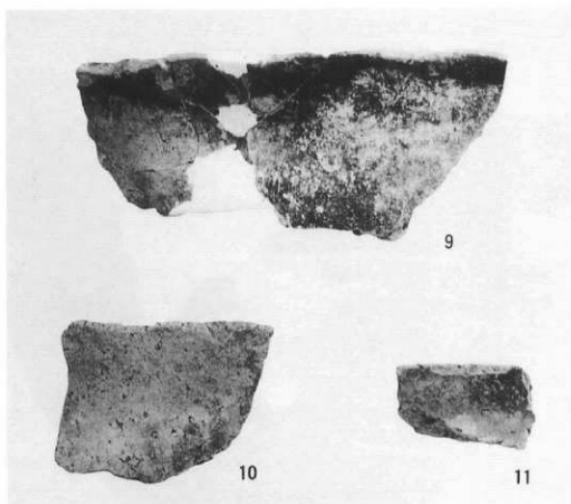


写真22 穫穴住居跡 (SA1) 出土甕



写真23 穫穴住居跡 (SA1) 出土壺

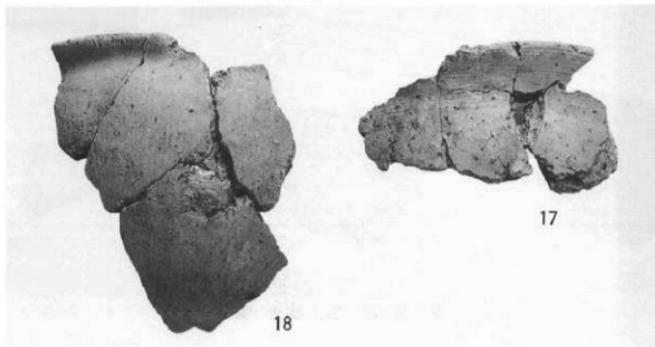


写真24 穫穴住居跡 (SA1) 出土鉢

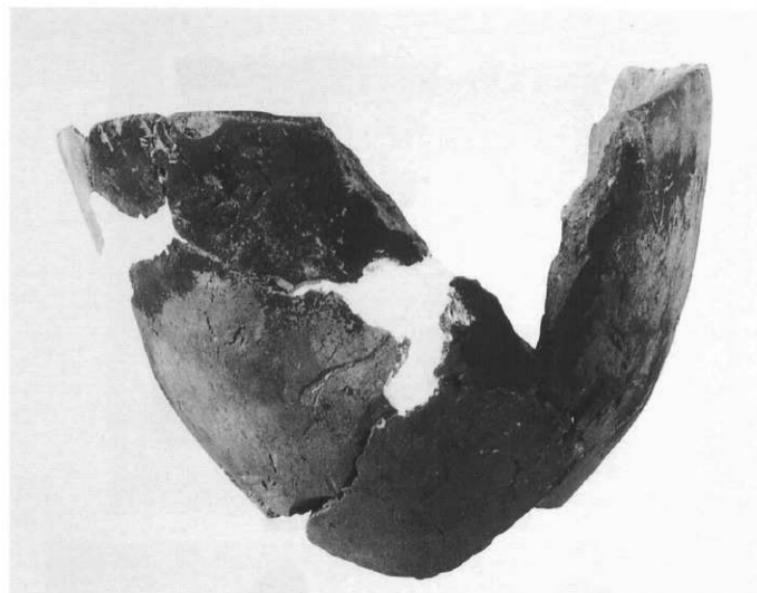


写真25 壁穴住居跡(SA1)出土鉢(22)

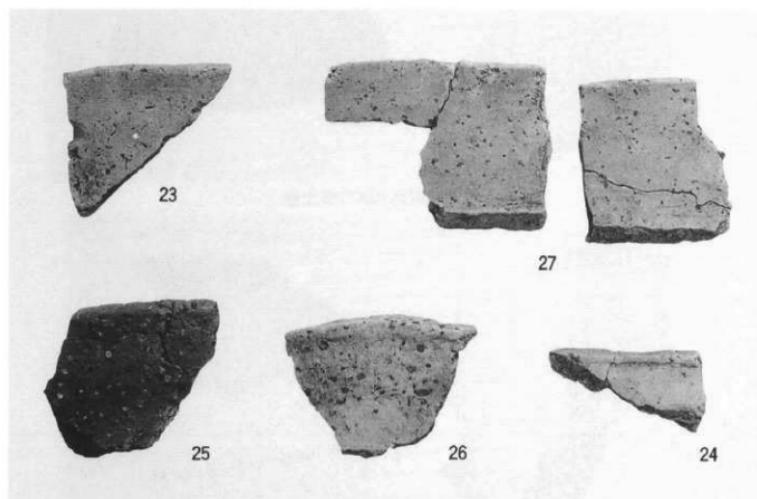


写真26 壁穴住居跡(SA1)出土 鉢・高坏

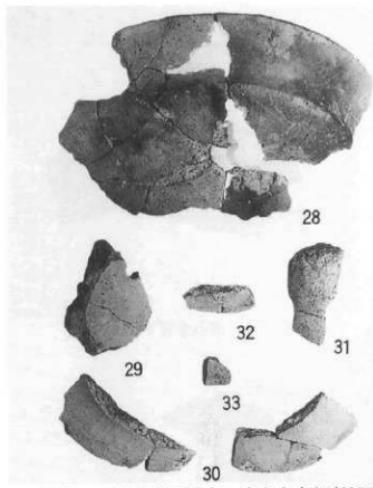


写真27 竪穴住居跡(SA1)出土高坏(外面)

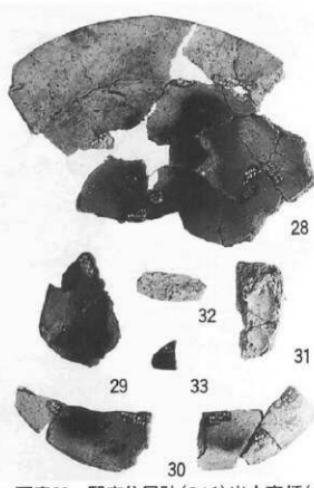


写真28 竪穴住居跡(SA1)出土高坏(内面)

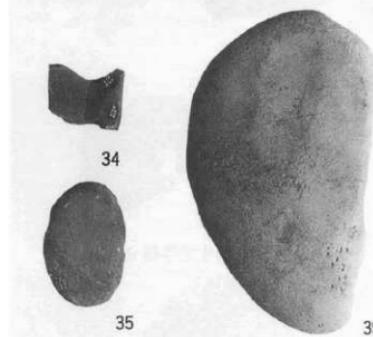


写真29 竪穴住居跡(SA1)出土石器

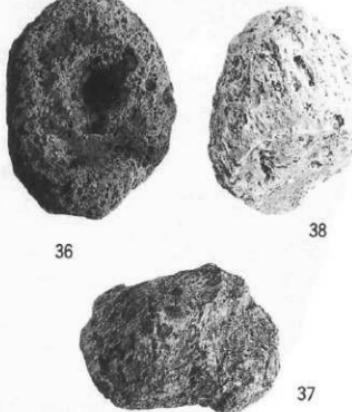


写真30 竪穴住居跡(SA1)出土軽石加工品



写真31 包含層出土手づくね土器(56)



写真32 包含層出土台付鉢(48)



写真33 包含層出土弥生土器



写真34 穿孔を有する土器(43)



写真35 包含層出土高環(52)



写真37 同左把手部分



写真36 包含層出土 特殊土器(52)



写真38 同上底部(穿孔あり)



写真39 中世土師器

写真40 土坑SC2出土土製品(58)

表3 報告書抄録

フリガナ	カジヤイセキニ					
書名	加治屋遺跡2					
副書名						
卷次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第35集					
編集者名	柴畠光博					
発行機関	都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	1996年3月30日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
カジヤイセキ 加治屋 遺跡	ミヤコノシタミヤコロ 都城市 南横市 町字加治屋	31°44'13"付近	131°02'46"付近	1996.10.04 ~ 1996.11.07	587	民間分譲 住宅建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
集落跡	縄文(後期)			土器(三万田式系)・剣片		昭和63年の隣接地の調査に引き続いて、弥生時代後期の住居跡が検出された。
	弥生(後期)	竪穴住居跡1・ピット		弥生土器・砥石 軽石加工品		
	中世	土坑1・溝状遺構1 道路状遺構1・ピット列1		土師器		
墓地	近世			石塔		

加治屋遺跡

都城市文化財調査報告書第35集

1996年3月

編集発行 宮崎県都城市教育委員会

〒885 宮崎県都城市姫城町6街区21号

TEL(0986)23-9547 FAX(0986)24-1989

印 刷 (株)みやこ印刷

〒885 宮崎県都城市大王町51-22

TEL(0986)23-1682 FAX(0986)22-1682